SAVER KNIGHTS　―SIDE Knights―

秋月真氷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＳＡＶＥＲ　ＫＮＩＧＨＴＳ　―ＳＩＤＥ　Ｋｎｉｇｈｔｓ―

【Ｎコード】
Ｎ７３６２Ｉ

【作者名】
秋月真氷

【あらすじ】
ある日、突如として僕らの世界に現れた招かれざる客、「プラチナス」。彼らはこの世界に、宣戦布告した。「我らの為に、全員死ね」と。侵略者達のその企み…僕と相棒で止めてやる。僕達…セイバーナイツが！この世界の平和は僕達が守る。
特撮好きが高じて、それを意識した作品にしようと思っております。見切り発車もいいところですが、お時間ありましたらお付き合いください。

Ｓａｖｅ－１：セイバーナイツ、参上！（前書き）

当作品は、公私共に仲良くさせて頂いている作家、辰巳結愛様とのコラボ作品です。　＊
私、秋月はヒーローパートを担当させていただいております。
それでは、ヒーローもの大好きっ子の僕が書きます当作品。お付き合いいただけましたら幸いです。よろしくお願い致します。

Ｓａｖｅ－１：セイバーナイツ、参上！

絹を裂くような女性の悲鳴が、人気の無い夜道にこだまする。
ほんの少し前までなら、痴漢とか通り魔とか、そう言ういわゆる犯罪者って奴だと思ったかもしれない。
だが、今は違う。
悲鳴の元に駆けつけてみれば、案の定、仕事帰りと思しき女性が、怪物に襲われている所だった。

「やめろぉぉぉっ！」

咄嗟に僕はその怪物を蹴り飛ばし、女性からそいつを引き離すと、すぐに女性の方を振り返って彼女の安否を確認する。

「大丈夫ですか？」
「は…はい」

怯えたような表情で、僕の問いかけに頷く女性。まだちょっと襲われたショックから抜け出せていないみたいだけど…見たところ怪我は無いようだ。

「早く行け。ここは俺達が何とかする」

僕の隣に立つ相棒が、怪物から目を逸らすこと無く女性に言う。
余程怖いんだろう、女性はこくこくと頷くと、一目散に怪物とは反対の方向へと逃げていった。
…さて。

「貴様等…よくも邪魔を……っ！」

僕に蹴られた怪物が、ゆっくりと立ち上がりながら怒った声でそう言った。
フォルムは、人間に近い。ただ、蛇の顔をしており、全身が淡い緑に光る鱗に覆われている人間がいるのなら、見てみたいものだが。

「プラチナスの怪人、だね」
「…知っていてこの俺を蹴り飛ばすとは…良い度胸だ」
「貴様等に誉められても嬉しくもなんとも無いな」

言いながら、僕達は右腕を横に、左腕を縦に交差して十字架のような形を作り、同時に宣言する。

『ナイトチェンジ！』

左手で、右手首につけていたブレスレットのスイッチを入れ、その一瞬後に右腕を振るう。
スイッチを入れた事により、僕達の音声を認識して変身プログラムが作動、ブレスレット内で微粒子状に収納されていたアーマーが僕達の体に照射、定着する。
右手を振るったのは、見た目の格好良さを演出すると同時に、より早く体にアーマーを定着させるため。
僕のアーマーの基本色は白。灰色のボディスーツに、脚部、胸部、頭部には純白のガード。イメージとしては西洋の騎士の甲冑を、もっと動きやすくしたような物。それに、やっぱり純白のマントがたなびいている。
相棒は、僕のアーマーと同じデザインの色違い。純白の僕のアーマーに対して、彼のアーマーは漆黒。

「聖なる光を纏いし純白！セイバーライトニング！」

「妙なる闇を纏いし漆黒！セイバーダークネス！」
『平和と正義の名の下に、セイバーナイツ、参上！！』

ポーズを決め、怪物の方に目をやると、実に忌々しそうな表情で僕達を見ていた。

「そうか…貴様等がセイバーナイツ…我々の計画を邪魔する、この世界の戦士か！」

今からほんの二週間ほど前。
突如として要塞が東京上空に出現した。おまけに彼等は、自らを「プラチナス」と名乗り、この世界を自分達の物にすると言い出した。そのために、この世界の人間を殲滅すると。
その日から、要塞から現れる怪物達が人々を襲うようになった。
当初は自衛隊や各国の軍隊がその空中要塞を落とすべく攻撃をしかけた。だが、要塞は今の科学力では解析不能のバリアが張られているらしく、どんな攻撃にもビクともしなかった。
それは、怪物達にも同じことだった。普通の攻撃は通じない。
人類は何も出来ないまま、たった一週間で、世界の人口の十分の一が殺されてしまった。
誰もが絶望しかけたその時。世界を…人々を守る手段を、力を、僕と相棒は手に入れた。

「貴様等の命…ここで散らすが良いっ！」

言うが早いか、怪物…とりあえずヘビ男と命名…は、僕に向かって駆け寄り、その口から何かの液体を数発、弾丸のようにして吐きつける。

見た目の汚さと嫌な予感の両方から、その攻撃をかわし、その攻撃の正体を見極める。
液体の付着した所は、何やらブスブスと白い煙を上げゆっくりと溶けていっている。

「溶解液！？」
「その通り。俺の吐く液体は、強力な溶解液であると同時に強力な毒液でもある」
「喰らえば俺達のアーマーも溶けそうだな」

相棒…漆黒の騎士、セイバーダークネスが呟く。だけど、その声にあまり緊張感は無い。
それに気付いたのか、ヘビ男は更に顔を不快そうにしかめる。

「余裕だな、貴様等。ここで死ぬと言うのに」
「フ…要は喰らわなければ良いだけの話だ。特に問題は無い。…そうだな？」
「まあね。って訳だから、悪いけどいきなり必殺技いかせてもらうよ！」

そう言って、僕と相棒は腰に差していた剣を引き抜き柄の部分にある穴に、エネルギーをチャージした宝玉を嵌め込む。
すると僕の剣は金色の、相棒の剣は闇色の輝きを放ち始め…その輝きの「糸」が、相手の動きを封じていく。

「な…身動きが…取れんだと！？」

もがくヘビ男。何とか「糸」を溶かそうと毒液を吐くが、実体の無いエネルギーであるそれが、溶けるはずも無い。
その間にも僕達は一気に距離を詰め…

『トワイライト・クロス！』

僕の持つ「光の剣」で縦一閃、相棒の持つ「闇の剣」で横一閃し、ヘビ男の体を十字に斬る。

「お…おおおおおおおおおおっ！」

体の自由を取り戻した時には既に遅く。

ヘビ男は、断末魔の悲鳴を上げ、緑色の粉となって消滅した。

「…槍、お疲れ様」

変身を解除し、やはり変身解除している相棒の肩を叩く。

彼の名は東風　槍影。外見は、漆黒の髪に漆黒の瞳。顔立ちは羨ましい程のハンサム。僕と同じ二十四歳のはずなのに、冷静な分もう少し大人に見える。目つきが鋭いせいか、第一印象は怖い感じの男だけど、実際は結構お人よしだし涙もろい。

一方の僕は南風　光矢。八分の一だけあるイギリス人の血のお陰か、日本人らしい顔立ちなのに金髪碧眼。お陰で学生時代は何度も先生に髪を染め直せと言われたことか。

高校時代からの付き合いで、互いに「槍」、「光」と呼び合う仲だし、一時期は家族ぐるみで付き合いがあった。

「光、どうでも良いが…敵の前で変身するのはやめておけ、と言った筈だな？」

「いやぁ…つい」

「正体がばれたら、周囲の人間が巻き込まれるかもしれないんだぞ？」

怒る、と言うよりも呆れたように言う槍。
槍の言うことはわかるつもりだ。敵に僕達がセイバーナイツであるとばれたら、彼の言う通り僕達の回りにいる人達が狙われるだろう。
何しろ相手は侵略者。どんな卑怯な手を使ってくるか分からない。
「ま…とにかくさ。今日は結果オーライって事で良いじゃないか」
にっこり笑って言った僕に、槍はこめかみを押さえながら小さくため息をついて…
「まあいい。帰るぞ、光」
「了解」
そう言って、僕達はその場を後にした。
…この時の僕は、これから戦いが激化していくことなど、全く予想もしていなかった……

Ｓａｖｅ－２：光と影　（前編）

フラワーショップ、「Ｌｉｃｈｔ　ｕｎｔ　Ｄｕｎｋｅｌ」。そこが僕と槍の勤め先であり家でもある。

怪物を倒した後、戻ってきた僕達を迎え入れたのは小学校低学年くらいの男の子だった。

綺麗な銀髪に、灰色の瞳。何も知らない人が見たら、多分女の子と勘違いするような、愛らしい顔立ちをしている。

夜も遅いと言うのに、彼は今まで待っていてくれたらしい。実にありがたい。

「お帰りなさい、お二人とも。『刺客』の退治、お疲れ様でした」

彼は僕達にぺこりと一礼すると、部屋の奥…リビングへと僕達を通す。そこには、彼が用意してくれたらしいお茶が、湯気を上げて僕達を迎え入れてくれた。

「ただいま、トゥラン」

彼の名はトゥラン。僕達に戦う術（すべ）を…僕達の鎧、ナイトアーマーを与えてくれた張本人である。

実を言えば、彼は「プラチナス」の連中と同じ世界から来たらしい。ただしこの世界に来た目的は、連中からこの世界を守ること。

元々彼は、「反プラチナス組織」に属していて、彼らの異世界侵攻を快く思っていなかったらしい。

そのために彼はセイバーナイツの鎧…「ナイトアーマー」を作り、この世界で最初に出会った僕達に、この世界を守る「騎士」になるように頼み込んだ。

…そして、僕達はその頼みを受け入れて、セイバーナイツになっ

たのである。

「ナイトアーマーの調子はいかがでした？」

「僕は絶好調だったけど…槍は？」

「アーマー自体に問題は無い。だが、剣へのエネルギーチャージに時間がかかる」

「分かりました、調整しておきます」

あ、言い忘れたけど、トゥランは優秀な科学者だ。それは多分、さっきの説明で薄々感じてくれているとは思うけれど。

本当はトゥラン自身が戦うつもりだったらしいが、それは僕達が止めた。彼に戦闘のスキルはないし、何より僕達自身が、僕達の住むこの世界を守るべきだと思ったから。

僕達だけじゃあ、このウルテクの塊みたいなアーマーの整備なんて出来ないから、正直トゥランがいてくれるのは助かってるけどね。

持ちつ持たれつって奴？

「…光矢さんも槍影さんも、本当にお強いですよね。羨ましいです」

「その代わり、お前はアーマーの整備ができる。人それぞれだ」

槍のフォローのためか、トゥランの顔に子供らしい、満面の笑みが浮かぶ。

槍は、喋り方こそ冷たい感じだけどちゃんと温かみのある人間だ。そうじゃなきゃ、この世界を守る戦士なんて、きっとできやしない。

「明日も早い。さっさと寝るぞ」

「はいはい」

そう。フラワーショップの朝は早いんだ。

…お休みなさい…。

＊

「Ｌｉｃｈｔ　ｕｎｔ　Ｄｕｎｋｅｌ」とは、「光と影」を意味するドイツ語。

今でこそ僕と槍の二人の店として定着しているが、元々は僕達の高校時代の恩師の奥さんの経営していた。就職活動に行き詰った僕に、その奥さんが雇ってくれた。後で理由を聞いたら、僕の名前が「光矢」で、店にぴったりだと思ったからしい。

朗らかで、とても綺麗な人だった。先生も、爽やかな人で本当にお似合いの夫婦だった。

槍がここで働くようになってからは、より一層にぎやかになったし、楽しかった。本当の家族のように接してくれていた。

…それなのに。

先生も、奥さんも。

連中…プラチナスの最初の「狩り」で、帰らぬ人となった。

僕の目の前で、怪物…後に刺客と呼ぶのだと知った…に殺され、僕自身も怪我を負った。怪我程度ですんだのは、本当に奇跡に近かったらしい。

悔しくて、悔しくて。毎日、力の無い自分を責めた。そして、平然と先生達を殺した、連中（プラチナス）のことも、激しく恨んだ。いや、憎んだと言っても良い。

……僕がプラチナスと戦う理由は、本当に世界を守るためだろうか。

「世界を守る」と言う大義名分を掲げて、本当は自分の憎しみを晴らすために戦っているんじゃなかろうか。

…時々、そう思う。

確かに、襲われている人を見ると、助けなきゃって思うし、じっとしてもいられない。けれどそれは、ひょっとしたら、襲われている人の姿を、先生や奥さんと重ねているからかもしれない。

以前、そんなことを悩んでいると槍に言ったら、「馬鹿が」と一蹴された。…戦う理由なんて、そんな物だろうとさえ、言われたっけ。
それで良いのかどうか、僕にはわからないけれど…少なくとも、この世界を守れるのは僕達だけだ。だから、戦う。僕みたいに、悲しみに囚われた人を、これ以上増やさないためにも。
そう思って戦っても…良いよね…？

＊

「今日も良い天気だー！！」
抜けるような青い空。小鳥は地上の争いなど気にしない様子で和やかに鳴いている。視界に連中の要塞が入らなければ、清々しい一日になっていただろう。
あいつらは…何の目的で、人間を皆殺しにする気なのだろう。
そもそも、目的なんかあるのかなぁ…

「本当ですね。どうか、良い一日になりますように」
うーんと唸る僕の隣で、祈るようにトゥランが言った瞬間、店の奥にあるパソコンから、警告音が鳴り響いた。
…これは…プラチナスの要塞から、怪物が出た警告。
あの要塞は、確かに防御に優れている。だが、同時に内部からの攻撃も出来ないらしい。内部から外に出るには、一瞬だけ、その要塞を囲っているバリアを解除する必要があって、この警告はそのバリアが解除されたことを察知して知らせてくれる優れものだ。
ちなみにこれも、トゥラン作。制作時間、なんと三十分。
いやー、やっぱり彼は凄い。ただの子供じゃないだろうってことは、大人びた口調からも分かる。物腰も優雅だし、気もきくし…

って、親馬鹿みたいなことを考えてる場合じゃなかった！刺客が現れたってことは、悲しむ人が現れるってことでもあるんだから。それだけは、何としても阻止しないと…！

「残念ながら、『良い一日』にはなりそうに無いな。朝から刺客など…連中は何を考えているのか」

「仕方ありません。ご武運をお祈りしております」

「ありがとう。悪いけどトゥラン、店番よろしく！」

「はい！」

にっこり、綺麗な笑顔で僕達を見送るトゥランの声を背にしながら、僕達は要塞の麓の方へと駆け出して行った。

Ｓａｖｅ－２：光と影　（後編）

要塞の麓は、ちょっとした森のようになっている。
都心にこんな場所があったなんて、セイバーナイツになる前は知らなかったな……
つい、のんびりと森林浴に浸りそうになるのを堪え、僕と槍は気配を殺して周囲を見回す。どこに刺客が潜んでいるか、分からないからだ。
緊張しながら視線を泳がせていた僕に、唐突に槍が、立ち止まった。その視線の先には、人とは異なる形をした、二足歩行の異形…刺客。そして、その周囲には卵のようにのっぺりとした顔に黒い全身タイツを纏った兵士、ピートの姿もある。

「ちょっ…何、あれ！？」
「形状から察するに、カジキじゃないか？」

いや、まあ…確かにそうとしか見えないけれどね。
刺客の姿は、多分カジキマグロ。そうだな…カジキの顔をした人間を思い浮かべてくれると分かりやすいかも知れない。首にあたる部分にはエラと思しき切れ込み、手には顔と同じ様なヤリを持っている。

「行くぞ、光」
「了解」
『ナイトチェンジ！』

相手に気付かれぬように変身を完了させると、僕達は殺していた気配を生き返らせ、悠然と刺客の前に姿を見せる。

「そこまでだ、プラチナス！」
「貴様らが何を企んでいるのかは知らんが、この世界を好きにはさせん！」
「貴様ら…まさか！」

僕らの姿を見た刺客が、一瞬だけ驚いたように声をあげる。
それじゃ、いつもの口上やりますか！

「聖なる光を纏いし純白！セイバーライトニング！」
「妙なる闇を纏いし漆黒！セイバーダークネス！」
『平和と正義の名の下に、セイバーナイツ、参上！！』
「現れたな、セイバーナイツ。待っていたぞ！」

心底楽しげな声を出し、その刺客は油断無くヤリを構える。
…今更だけど、あの顔で、どうやって声を出してるんだ？魚に声帯ってあったっけ？

「私は『子爵（ヴィスカウント）』サンディエ様に作られし第一号アサルト！メカジキの細胞から生み出された、ジキメだ！…あ、これ、カジキの唐揚げです。良かったら後で食べて。毒とかは入ってないから、安心してね」
「あ、ご丁寧にどうも」
「暢気（のんき）に貰ってる場合か、この馬鹿！」

いや、だって何か和やかな雰囲気だったし。勢いでタッパー貰っちゃったよ…
案外と律儀な奴かもしれない、このジキメって刺客。名乗り上げてたし、唐揚げも貰っちゃったし。これで今日のお昼ご飯代が浮いたかな？
とか思った瞬間、ジキメはびしりと僕達を指差すと…

「それでは、気を取り直して…行け！ピート！」
「キィィィ！」

卵みたいな顔して、本当にどこから声が出てるのか。
暢気なことを思いつつも、僕と槍は腰に差していた剣で、相手を叩き伏せる。
この程度の相手は、朝飯前だ。数が多くても、戦い方は単調なので、すぐにその攻撃が読めてしまう。僕も槍も、襲ってくる相手を軽く切り伏せる。
だけど…僕の中に、奇妙な違和感がある。
……どうしてあの、ジキメと言う奴が、襲ってこないのか。
不審に思い、ジキメの方を見た瞬間。槍と切り結んでいたピート達が、ざっと音を立てて後退し…ジキメの道を作った。
一直線、ヤリで貫くにはうってつけの道を。

「戦闘に特化したこの俺…勝てると思うな！」

ジキメは怒鳴るが、槍は今の状況を理解し切れていない！
慌てて僕は二人の間に入り、繰り出された突きの威力を殺し、脇方向へいなす。
今までの連中とは違う。早いし、強い。だが、必殺のつもりで繰り出した攻撃をいなされたのが意外だったらしい。相手はかっと目を見開くと、ピタリとその動きを止めた。
呆然としている、今なら！

「相手がカジキなら…一本釣りだぁぁぁ！」
「普通は延縄漁法だ、馬鹿！」

馬鹿馬鹿言うなぁぁぁぁっ！

「ダークネススラッシュ！」
「ライトニングアタック！」

ほぼ同時に、槍がジキメの持っていたヤリを、僕がジキメ自身の吻を、それぞれ切り裂く。
そのままの勢いで、僕達は剣に宝玉をはめ込み、必殺技を発動させた。
おお、エネルギーのチャージ時間が、昨日よりも短くなっている！トゥランの奴、いつの間にメンテナンスを！？
ありがたいねぇ、帰ったら肩揉んであげよう。
暢気に思いながらも、僕は未だ動かないジキメに向かって、剣を縦に振り下ろし…

『トワイライト・クロス！』

光と闇で形成された十字架が、人を殺すために作り出された存在に刻み付けられる。
その時になってようやく、ジキメは動き出した。
心底すまなそうに、その右手を天に掲げ…

「サンディエ様…申し、訳……」

最期に、何かを言い残そうとして…だけど、そのカジキマグロの怪人は、黄色い塵となってこの世から消えた。
……間違いない。敵は、強くなってる……
だけど、負ける訳には行かない。
この世界を、守るためにも…僕達は、プラチナスを倒す。
…絶対に……

Ｓａｖｅ－２：光と影　（後編）（後書き）

次回、ＳＡＶＥＲ　ＫＮＩＧＨＴＳ　－ＳＩＤＥ　Ｋｎｉｇｈｔｓ－

「間違いありません、敵は明らかに、お二方に対する戦闘に特化するように作られています」

「今度は鴉か。空中戦は厄介だな」

「お前達は…遊びで人殺しをしてるのかぁぁぁっ！」

次回、Ｓａｖｅ－３：血塗れの鴉

＊

……って、次回予告！？

何ですかこれ、ノリでやっちゃいましたが…

いや、確かに次回はそんな感じで流すつもりですけど。

＊

ここで皆様にご質問。次回以降、こう言った「予告」があった方が良いでしょうか？

メッセージにてご回答頂けましたら幸いです。

（これ、感想じゃないですから…）

それでは、次回また。

Ｓａｖｅ－３：血塗れの鴉　（前編）

「光矢さん、ご存知ですか？」
「何を？」
「また、この近くでバラバラ殺人があったらしいです」

テレビの画面を食い入るように見ながら、苦しそうに眉を顰めて言うトゥランに、僕も思わず黙り込んでしまう。
ここ数日、物騒な事件が起きている。それが、バラバラ殺人。常軌を逸しているとしか思えない程、相手を切り刻みその亡骸を畑やら果樹園やらに散らかして行く。
勿論、殺害現場にはおびただしい量の血液がぶちまけられている。その現場に残る、唯一の手がかりは…鴉の羽らしい。
それにしても…また、か。
この常軌を逸した行為、普通の人間の仕業とは思いたくない。プラチナスの刺客の仕業では無いだろうかと疑ったものの、こちらの警報には引っかかって来ないんだよね…

「それで僕、思ったんですけど…」
「ん？」
「一連の殺人は、やっぱりプラチナスの刺客の仕業で…ひょっとしたら、バリアを解除しなくても、外に出る方法を手に入れたんじゃないかと」

…確かに、その可能性はあるかもしれない。
何しろあんな怪人を生み出すことが出来る連中だ。バリアの改良くらい、訳ないのかも知れない。
それを考えると、この一連の事件…

「だとすると、一気にきな臭くなったな、光」
「ああ」
「だが、警報にかからない以上、何処に現れるかは分からないな……」

確かに。今までは要塞、シュラーフェス周辺って言う認識があったから、割とすぐに駆けつけることが出来たけれど…今回は違う。
もしも本当にこの事件の犯人がプラチナスの刺客なら、無差別に人を襲っているだろう。そうなると、出没する場所の見当なんて、そう簡単につけられる物じゃない。
さて、どうやって見つけるか……

「あの…」
「何だ？」
「今までの殺人のケースから考えて、相手は街中に現れると思うんです」

…まあ、確かに。最近の殺人は、街で殺されて畑に捨てられるってパターンだったな…

「けど、街って言っても…結構広いよ？」
「とてもじゃないが、二人でフォローしきれるとは思えないな」
「いえ、お二人にパトロールをしてもらうのではなく……」

言いながら、トゥランは手元のパソコンを操作しだす。その指の動きに合わせるように、画面には幾つもの画像が映し出されるのだが…
…もしもしトゥラン君？早すぎて、指先が見えないんですけど。
それに、この映像は何？何となく画像の質が悪いし、白黒だし、動きがカクカクだし…

「…防犯カメラか…！」
「え…？」
「槍影さんのおっしゃる通りです。商店街の防犯カメラの回線に割り込んでみました」
待って、トゥラン。それ、多分この世界じゃ犯罪だから。
ある意味、盗撮だよ？
「光、お前が何を気にしてるのか、大体の予想は付くが…非常時だ、許されるだろう」
「大丈夫です、ここからアクセスしてるって痕跡は、消してますから」
そう言う問題じゃないって！倫理観の問題！正義の味方がそんなことして良いの！？
とか、そんな僕の心の声を無視して、トゥランはどんどん色んな防犯カメラの回線にアクセスしていく。
そして、その中に一つ…どうしても見捨てて置けないシルエットが、映し出された。
明らかに人間じゃ、無い。顔はどう見ても何かの鳥。手に当たる部分は翼になっている。白黒映像だから良く分からないが、どこかで見たことあるような鳥だ。
これは恐らく…
「鴉の刺客か！？」
そう言えば、ニュースで言ってたっけ。殺害現場には、「鴉の羽根が残っていた」って。
って事は、まさか！

「やはり最近のバラバラ殺人…奴の仕業らしいな！」
槍も同じところに思い至ったらしい。悔しげにその怜悧な顔を歪め、吐き出すように呟いた。
これ以上の被害者を出す訳には行かないし、あいつらの好きにさせてたまるものか！

「トゥラン、場所は！？」
「ここからバイクで１５分程度の場所です！」
「了解、行って来るよ！」
「お気をつけて」

ぺこりと頭を下げるトゥランの方を、一瞬だけ振り返って…僕達は、その刺客の元へと急いでバイクを駆った。

『ナイトチェンジ！』

現場に到着、刺客の姿を認めるや否や、僕達二人は腕を十字に構え、ブレスレットのスイッチを押す。
ナイトアーマーが定着するまで、その時間僅か一マイクロ秒。瞬きよりも早く、僕等の姿はセイバーナイツへと変わる。

「そこまでだ、プラチナス！」
「これ以上、この世界を貴様等の好きにはさせない」
「聖なる光を纏いし純白！セイバーライトニング！」
「妙なる闇を纏いし漆黒！セイバーダークネス！」
『平和と正義の名の下に、セイバーナイツ、参上！！』

ビシリとポーズを決めた僕達に、その鴉顔の刺客は楽しそうに一声鳴くと、恭しい態度で僕等に一礼する。
あ、何か紳士かも。
……いやいや。紳士は人を、あんな無残な姿に変えたりはしないから。しかも、あんな…血塗れの紳士なんて、普通いないから。
と、自分に突っ込んでおく。
濡れ羽色、とはよく言ったものだ。今目の前にいる鴉は、間違いなく濡れた羽根を持っている。
…奴が殺したであろう、人間の血で。

「貴様等が噂のセイバーナイツか。ならば俺も名乗らせてもらおう。我は『伯爵(カウント)』フレイル様により、ハシブトガラスの細胞から造られし者。名はロウク。貴様らを倒す者の名だ、覚えておくと良い！」
「しかし、敵は鴉か。空中戦は厄介だな」
「いきなり弱気なこと言わないでよ…」

苦笑気味に言った槍に、僕も仮面の下で苦笑して返す。
確かに、僕達は空を飛べない分、空中戦は苦手だけどさぁ…

「セイバーナイツ！ここで消えてもらうぞ！」

言うが早いか、その鴉頭…ロウクと言うらしいそいつは僕達に向かって空中から攻撃を仕掛けてくる。
ある時は刃物のようになっているらしいその羽根を飛ばし、またある時は僕達に向かって翼を打ちつけてから、僕達の攻撃の届かない空中へと飛び去る、ヒット・アンド・アウェイ。
何とか致命傷は免れているけれど、全く攻撃を喰らっていない訳でもない。細かい傷がアーマーに入り、打たれた部分は、正直痛い。

「カーッカッカッカァ！そろそろトドメだっ！」

高らかにロウクは笑うと、更に空高く舞い上がり…ある程度の高さまで上昇すると、こちらへ向かって一気に下降する！

危ないと思うよりも先に、条件反射的に体がその突撃を避ける。加速がつきすぎているためか、敵は途中で止まることなく、近くの建物へと顔から突っ込んでいくが……

どがんっ！

派手な音がしたと思った次の瞬間、建物の壁…鉄筋コンクリート製と思しきそこには、綺麗な円形の穴が開いていた。

……死ぬ。喰らったら確実に死ぬ。あんな攻撃、いくらナイトアーマーでも穴が開く。

思い、次の攻撃に備えるが…どうしたんだろう、なかなか建物から出てこない。何か企んでいるのか…！？

油断無く剣を構えながら、ロウクの姿を確認すべく僕達はその建物に近寄った、その瞬間。屋根をぶち抜いて、ロウクは再び空高く舞い上がった。

建物に突っ込んだくせに物凄い元気だし！

けれど…どうする、どうやって勝つ？良い案も思い浮かばないまま、それでも勝つ方法を考える。

勝たなきゃ、いけないんだ。この世界を守るためにも。

槍も僕と同じ考えらしい。隣でギリギリと奥歯を噛み締めながら、それでも睨みつけるようにロウクを見やる。

だが、ロウクが襲ってくる様子は、一向に無い。それどころか、忌々しげに舌打ちをすると…

「もう夕暮れか…命拾いしたな、セイバーナイツ！」

そんな言葉だけを吐き捨て、奴は一声だけ甲高く鳴くと、バサリと羽音を残してこの場を去ってしまった。

……どう言うことだ……？

不審に思う僕等をよそに、ロウクはそのまま、あの要塞の方へと姿を消してしまったのであった。

Ｓａｖｅ－３：血塗れの鴉　（後編）

「間違いありません、敵は明らかに、お二人に対する戦闘に特化するように作られています」

帰るなり、僕達はトゥランに今日のことを話すと…返ってきた答えが、これだった。

ナイトアーマーには、戦闘を記録する小型カメラが付いていて、前回のジキメ、そして今回のロウクのデータを纏めた結果、その答えが出たらしい。

トゥラン曰く、今までの刺客は、いかに多数の人間を殺すかに特化した刺客だったらしい。だが、前回と今回は違う。「確実に僕達を倒すこと」を目的に作られた、新しいタイプの刺客だと言うのだ。

「道理で、前回のジキメと言い、今回のロウクと言い…やたらと強かった訳だ」

悔しそうに吐き出す槍に、僕も黙って頷く。

ジキメはまだ、何とかなった。だけどロウクは……

「何であいつ、僕達を見逃したんだろう？」

「ああ、それは俺も気になった。夕方がどうこう言っていたが…」

あのまま攻撃が続けば、ひょっとしたら僕達は負けていたかもしれない。それを考えると、ロウクの方が優位に立っていたのに、どうして…？

そんな疑問が僕達の頭を過ぎる。一方で、トゥランはまるで当たり前のことであるかのようにきょとんとした顔をして…

「え？だって、鴉の刺客だったんですよね？」
「あ、うん」
「だったら、答えは一つだけです」
年相応の、愛らしい笑顔を浮かべて。トゥランは大真面目な声で、一言。
「多分、鳥目なんですよ、その刺客」
……え、いや、ちょっと待って？
確かにそう考えると、辻褄は合うんだけどね。
僕、「鳥目の怪人」なんて聞いたこと無いよ？
「鳥目って…そんなことで見逃された僕等って…」
「そうがっかりするな、光。とにかく今は、ロウクへの対策を考える方が先だ」
そりゃあ、そうだけどね…
呆れにも似た感情を抱きつつ、僕達はロウク対策を練っていた。
…だけど結局、何の案も思いつかないまま夜は明けて。徹夜明け故の、独特の倦怠感と戦いながら、お花屋さん稼業もこなしていた、そんな時。
店の奥でパソコンと睨めっこしていたトゥランが、緊張感溢れる声を上げた。
「光矢さん、槍影さん、出ました、ロウクです！」
「何！？」
ロウクと言う単語に反応し、槍は着けていたエプロンをかなぐり捨ててトゥランの指示した場所へ向かう。

…ああ、良かった。お客さんの殆どいない時間帯で。
「トゥラン、毎回のことで悪いんだけど…」
「店番ですね」
「よろしく」
それだけ言うと、僕もまた、ロウクが出たという場所に向かって、バイクを走らせた。
…多分、滅多に無いよ？店員が不在がちで、小学生の男の子に店番やらせる花屋なんて……

「現れたな、セイバーナイツ。待っていたぞ」
くっくと喉の奥で笑いながら、ロウクはすいとその目を細めて言い放つ。
絶対的な勝利への自信からか、随分と慢心しているように見える。
まあ…確かにこっちは、何の策も持ってはいないんだけど……それでも、ムカつくって言うか？
「では…今日こそ貴様らの息の根を止めてやる！」
言うが早いか、ロウクは昨日と同じように、空から放つ羽根の攻撃や、こちらの隙を付いた翼で打つ攻撃を放つ。
ああもう！馬鹿の一つ覚えみたいに…って言いたいところだけど、その攻撃にすら手も足も出ない僕等にもムカつく！
思いながら、何とか攻撃をいなす僕の後ろで。
何かを思いついたらしい槍が、低い声で僕の耳元で囁いてきた。

「おい」
「何？」
「あいつが、もしも本当に鳥目だとしたら…方法はあるかも知れないぞ」
「へえ、どんな？」

正直、この状況を打破できるんなら何でも良いです。
と、思った瞬間。槍は剣の柄に宝玉をはめ込んだ。
ええっ！？いきなり必殺技発動！？

「何をする気だ、セイバーダークネス？」
「貴様、俺の名乗りを忘れたか？」

キィンと槍の剣が小さな音を立てる。剣自身に、エネルギーが溜まった証拠だ。
…槍の、名乗り？確か…

「俺は、『妙なる闇を纏いし漆黒』と、言ったな？」

え、ちょっと槍影君。まさかとは思うんですが……

「俺はセイバーダークネス！その名の通り、闇を呼ぶ戦士だ！」

あああああっ！やっぱりですかぁぁぁっ！
槍の纏うナイトアーマーは、ダークネスの名の通り、闇を呼ぶ。一人で技を発動させれば、この辺り一帯を、僅かな時間ではあるが、夜よりもなお暗い闇に落とすことが出来る。
逆に僕のアーマーはライトニング…つまり光。逆に、世界を照らす光を呼ぶ鎧だ。
槍はその特性を活かして、擬似夜間を作る気満々なんだ！って言

うか何でそのことに昨日の内に気付かないかな、僕等は！？

「妙なる闇に堕ちろ、ロウク！」

槍の、その言葉が合図になったように。周囲一帯、夜と見紛う程の闇が覆った。

「が…っカァァァッ！景色が…世界が見えん！」

…うぅわぁ。本当に鳥目なのかぁ。

アーマーのお陰ではっきりと見える僕達とは違い、ロウクの方はあからさまに狼狽し、宙から地面へを落ちてくる。

それを確認すると僕は、見えない恐怖で悶えるロウクに、静かに問いかけた。

「一つ、聞きたい、ロウク」

「くっ…何だ？」

「何故、人を殺した？あんな無惨な方法で」

「理由？そうだな……自分のため、とだけ言っておこうか」

自分のため、だと？自分の、何のために人を殺すって言うんだ。

わざわざその亡骸をバラバラにし、別の場所に持っていく。そして、無造作にその亡骸を捨てる。血の匂いに酔っていたとしか、思えない。

こいつらは……！

「お前達は…遊びで人を殺してるのかぁぁぁぁっ！」

「おい！」

槍の、静止の声が聞こえた気がした。

だけど、今の僕には聞こえない。遊びで…遊びで先生が、奥さんが、罪もない人々が殺されたと！？
冗談じゃない！許せるもんか、そんなこと…絶対に許せるもんか！
「遊びだと？こちらとて、真面目に殺している！」
「それが尚更、性質が悪いって言うんだよ！」

感情に任せた剣だと、自分でも分かっている。
こんなに怒っているのに、どこか冷静な自分がいる。
許せない、認められない、憎い…そんな感情が僕の体を支配し、ロウクを切り刻んでいた。
…彼が、この世界の人にやったように、バラバラになるまで。
何度も何度も、剣を振り下ろし、突き刺し、切り裂き……気付いた時には、既にロウクの姿は、赤い塵になっていた。

「……落ち着いたか？」
「…ごめん」

ああ、と思う。
結局僕も、プラチナスの連中からすれば、同じなのかも知れないと。
感情に任せ、「自分のため」に殺す所など、全く同じだ。我ながら情けない。こんなの、「正義の味方」じゃないよ…
勝ったのに、とても泣きそうな気分になりながら…僕は変身を解き、トゥランの待つ「Ｌｉｃｈｔ　ｕｎｔ　Ｄｕｎｋｅｌ」へと帰って行った。

Ｓａｖｅ－３：血塗れの鴉　（後編）（後書き）

次回、ＳＡＶＥＲ　ＫＮＩＧＨＴＳ　－ＳＩＤＥ　Ｋｎｉｇｈｔ－

「早く逃げろ、ここは食い止めてやる！」

「蒼野（あおの）氷女（ひめ）です。『氷の女』と書いて、氷女」

「これ、ちょうど持ってたんだ。良ければどうぞ」

「ひょっとしたら…プラチナスは……」

次回、Ｓａｖｅ－４：蒼い女性

正義と平和の名の下に、セイバーナイツ、参上！！

Ｓａｖｅ－４：蒼い女性　（前編）

さて、皆は「花屋」と言う職業にどんなイメージを抱いているだろうか。大抵の人は、お店でお花を売っているというイメージをお持ちだろうと思う。

だけど、実際は店頭販売だけじゃない。花のデリバリーというのもあるんだ。

注文を受けて、それを時間までに相手に届ける仕事。注文は、花束だったりディスプレイ用だったり、時には仏花だったりと様々だ。

で、今の僕は「彼女に贈る花束」のデリバリーに行って来た帰り。

お昼になる少し前に、槍の奴は

「花束は作っておいてやったから、お前はさっさと運びに行け」

なんて言って僕を追い出したんだ。

そりゃ、僕は花言葉を覚えてない駄目店員さんだよ？だからって、

「お前はバイクを転がすか、喧嘩をするか、顔で客寄せするかしか能が無い」

なんて台詞…いくら長年の付き合いのある相棒だからって、酷いと思わない！？

…まあ、依頼人も満足そうにしていたし、そう言う顔を見ると、花屋をやっていて良かったなぁって思うんだけど……

あの人、彼女さんと上手く行くと良いなぁ。あーあ、僕も恋人が欲しいなぁ。槍のあの厳しい仕打ちを癒してくれて、一緒に居るだけで幸せって気分になれる、そんな子が。

…いや、無理か。プラチナスがいる限り、そんな野望も夢のまた夢……いつ戦いになるか分からないから、デートもきっとままなら

ないだろうし、何より万が一にも僕がセイバーライトニングだとバレたら、真っ先にその恋人が狙われることになる。
ならば！やっぱり一刻も早くプラチナス連中を倒して、恋人を危険に曝さない世の中にしないと！まあ、その前に恋人を見つけろって話もあるんだけど。
そう思いながら、「Ｌｉｃｈｔ　ｕｎｔ　Ｄｕｎｋｅｌ」へ向かってバイクを走らせ、ただ今信号待ち…なんだけど。
ぐぅぅ……
あ、まずい。かなりお腹空いた。朝一から花の競り落としに行ってたし、お昼まだ食べてないし……
槍からは、寄り道をするなって厳重注意を受けてるけど…ちょっと位なら、良いよね？バーガーショップでハンバーガー一個食べるくらいの時間なら……
ここ最近、プラチナスの侵略も無さそうだし。
と言う訳で。僕は信号が代わると同時に、店へ帰る途中にあるバーガーショップへと向かったのであった。

＊

「あの…この辺りにお住まいの方でしょうか？」
バーガーショップから出てきたばかりの僕に、一人の女性がおずおずと言った風に声をかけてきた。
…何と言うか…一言で言って、青い。
僕より少しだけ年下だろうか、海を連想させる青い髪に、空色の瞳。服装も、水色に近いブルー系統で統一されたカジュアルな格好。
紺色のタートルネックのシャツの上に、ケミカルウォッシュのジージャンを羽織り、細身のジーンズのせいか、足はすらりと長く見える。首から提げているペンダントは、雪の結晶を模した形をしている。

……正直に言おう。思わず見惚れる程、その女性は可愛いと思った。童顔と言う訳では無いが、黒目がちの瞳、化粧気が無いせいか、女性特有の化粧臭さと言うものは感じない。

「あの…？」
「あ、ごめん。うん。確かに近所に住む者だけど」
「良かった…」

答えると、彼女はほっとしたように笑った。
どうやら、可愛いと感じているのは僕だけでは無いらしい。十中八九の人間が、彼女をちらりと見ている。

「あの、私、花を探しているんです。どこかに沢山の種類の花がある場所…ご存知ありません？」

唐突とも思えるその質問に、僕は我に返る。いやいや、見惚れている場合じゃないってば。
それにしても、花？種類を探してるなら…

「うちは、どうかな？花屋なんだけど」
「ああ、そうだったのですね。道理で…」

…？
何だ？この子、最初から僕に声をかけようとしてたのか？

「僕が、どうかした？」
「あ、いえ。あなたからは、花の香りがしていたものですから」

余程僕の問い方が怖かったのか、彼女は申し訳無さそうに目を伏せて、恐縮したように言葉を返してくれた。

怖がらせた！？
ちょっと待って、槍ならともかく、僕は割と怖がらせるような顔つきはしてないよ！？自慢じゃないけど、お店に来てくれる女子高生の皆からは「王子」って呼ばれてるんだよ！？槍は「カイザー」だけど！

「あーえーっと……良ければ、うちの店に来る？」

ああ、何かこれって、ナンパ男みたいじゃないか。そりゃあこの子は可愛いと思うし、下心ゼロだとは言わないけれど！
そんなことを悶々と考え込みそうになった瞬間。彼女の視線が、僕の後ろ…ある一点で固定された。
不審に思い、その一点をなぞると、そこには…緑色の、人より一回り位の大きさの異形の姿。
あれは…プラチナスが放った刺客じゃないか！

「ぐうぅぅぅをををっ！」

獣のような咆哮を上げ、どことなく鰐を連想させるその化物は、真っ直ぐに目の前に立つ、青い女性に襲い掛かる。
…ヤバイ。僕1人の時なら、変身して倒したりもできるけど、あまりにも人が多い中でやるのは、自分の正体をばらすことになる。それはやるなって、槍からもきつ～く言われている。
と、なると僕がとるべき行動は…

「こっちだ！」
「え…？」

とにかく、化物の狙いはこの子らしい。呆然としていた彼女の腕を引き、僕はひたすらに走る。

彼女を連れて、逃げるために。
これと言って、当てがある訳じゃ無いんだけど…

「青い髪の女…殺す、殺す、殺すぅぅぅっ！」

やっぱり、あの刺客は…この子を狙っているらしい。適当な所にこの子を置いて、どこか人目のつかないところで変身するか……
いや、そんな暇は無い。今はとにかく逃げ切らないと…

「あの、私を放して逃げて下さい」
「何言ってるんだ！？」
「あの怪人の狙いは、私です。別々の方向に逃げれば、あなたは助かります」

真っ直ぐに僕を見つめて言い切る彼女に、僕は芯の強さを見た。
この子は、可愛いだけじゃない。気が強くて、しっかりしている子なんだ。だけど…

「あのね、女の子を見捨てて逃げるなんて、出来る訳無いだろ？そんなことしたら、寝覚めが悪くて仕方が無い」

と、自分的にはかなり格好良く言いきったものの…正直、困った。
鰐の顔した刺客と、僕らとの距離は縮んで来ているし、逃げ回るのだって限界がある。
まずいと思った、その刹那。僕達を守るかのような、漆黒のシルエットが目に飛び込む。

「早く逃げろ、ここは食い止めてやる！」
「そ…セイバーダークネス！」

そう…僕の相棒、東風槍影こと、セイバーダークネスの登場だ！
ナイスタイミング、槍！出来過ぎとかご都合主義とかチラッと思ったけど、この際どうでも良いや！

Ｓａｖｅ－４：蒼い女性　（後編）

「何をしている、早く行け！」
「あ…うん！」

怒ってる！もたついている僕に、目茶目茶怒ってる！
こくこくと頷き、僕は隣で呆然と立っている女性の腕を引いて、少し離れた物陰に隠れた。
本当なら、もっと遠くに逃げた方が良いのかもしれないけど…女の子に無理をさせるのは、僕の「男の矜持」に反する。

「悪いが、さっさと終わらせてもらうぞ。」

え。ちょっともしもし！？なんか今日ちょっとトドメ早くない！？
僕の心のツッコミを無視し、槍が構えた剣からは陽炎のように揺らめく「闇」。それが徐々に彼の剣に吸い込まれるように収束して…

「ダークネススラッシュ！」

普段なら、僕の「ライトニングアタック」と共に放つことで、必殺技「トワイライトクロス」を発動させる技だが、単体でも充分な効果がある。
槍の呼ぶ闇は、その切り口から敵の体を侵食し、やがて虚無へと還す技らしい。大抵の敵は、そうなる前に塵になるんだけど。
今回も、そのパターン。鰐顔の刺客は、目的も告げぬまま緑色の塵になって、完全に消滅した。
それを見届けると、槍はちらりとこちらを見て…そのまま、どこかへと立ち去っていく。

「良かった…何とか助かったみたいだ」

槍の魔の手から。

心の中でそんな風に呟きつつ、僕は隣にいた女の子に向かって笑いかける。

それに応える様に、彼女も鮮やかな笑みを浮かべると、ぺこりと頭を下げて…

「…助けて下さって、ありがとうございました」

「いや…僕は何もしていないよ。実際にあの化物を倒したのは、セイバーダークネスだし」

僕の言葉に、彼女は困ったような笑みを浮かべた。

何となく、泣きそうな…そんな印象の笑みを。

「あ…えーっと、君の名前は？」

「……は？」

「あ、いや、その…今度、君が来た時のために良い花をリザーブしておこうかと思って。あ、俺は光矢。南風光矢」

いきなり何を言ってるんだ僕は！普通に考えて、変質者じゃないか！

いや、別にやましい気持ちは無いよ？本当に、ただ、彼女は花を捜してるみたいだったし…もっとお近付きになりたいと思わなくも無いけど……

「えっと…ヒメ」

へ？姫？

「蒼野氷女です。『氷の女』と書いて、氷女(ひめ)」

そう言うと、氷女と名乗った彼女は穏やかな笑顔を浮かべる。
「氷の女」と言う表現とは真逆の、暖かい印象を受ける。
凛とした所のある美人にも見えるし、穏やかな印象の可愛い女の子と言う印象も受ける。
「美人」と「可愛い」は同居しないと言うけれど、それは嘘だ。目の前の子は…蒼野さんは、間違いなく可愛くて美人だ。

「…今日はもう、帰りますね。…ちょっと、気分が優れなくて」
「そりゃ、あんなのに襲われたらね。…送ろうか？」
「いえ、結構です。そんな……お気遣い無く」

もしかしたら、警戒されてるのかもしれない。
いや、そりゃそうか。僕は男だし。さっきの会話からすると、この子の家って何となく遠そうだし。
ちょっと…いや、かなりがっかりしつつ、僕はくるりと踵を返した彼女…蒼野さんの背中を見送…ろうと、思った。だけど。
彼女はくるりとこちらを振り向くと、凄くにこやかな笑みを浮かべて……

「それから…守って下さって、ありがとうございます、光矢さん。また、お会いしましょうね」

……あ、まずい。何か良く分からないけど、胸がこう…ぎゅうっと締め付けられるようなこの切ない感覚は一体…？

「…光」
「うわっ！槍、いつの間に……」
「ずっとここにいたんだがな。…ああ言った、清楚系の女性が好み

とは知らなかった」
「んなっ……ななななな、何、言ってるんだよ！？」
「お前は分かりやすいからな」

と。なかなか帰って来ない僕への苛立ちをからかうことでぶつけて来る槍に、ものすご～く苛められながら。
僕達は店へと帰って行きました…

＊

「あれ？」

その日の夜。ダークネスの記録した映像を見ながら、トゥランが僅かに首を傾げたのを、コーヒーを飲んでいた僕は見た。
その視線の先には、今日現れた刺客と…僕と一緒にいた、蒼野さんの姿。

「どうかした、トゥラン？」
「その…この刺客、随分とこの女性に執着してるなぁって…」
「ああ、何か青い髪の女ってだけで狙われたみたいだよ？」

そう言うと、トゥランは僅かに驚いたように目を見開いた。
…あれ？そう言えば、何で連中はそんな人を狙ったんだろう？
「青い髪の女」なんて、早々いないのに…

「ひょっとして、プラチナスは……」
「ん？トゥラン、何か言った？」
「あ…いいえ。何も」

困ったように笑うトゥランを見て、問いただしたい気持ちになる

が…やめた。
何か気付いたら、きっと彼は言ってくれる。僕はトゥランを信じてる。

「すみません。多分、気のせいです」
「そう？あんまり夜更かししないで寝るんだよ？」
「はい」
「これ、ちょうど持ってたんだ。良ければどうぞ」

ホットミルクを差し出し、僕は一足先に自分の寝室に向かうべく歩き出す。
部屋を出て行く直前、僕の背中に…小さく、トゥランの声が聞こえた様な気がした。
……姉さん、と……

Ｓａｖｅ－４：蒼い女性　（後編）（後書き）

次回、ＳＡＶＥＲ　ＫＮＩＧＨＴＳ　－ＳＩＤＥ　Ｋｎｉｇｈｔｓ－

「き…きのこぉっ！？」

「冗談だろう？あんな巨大胞子、毒にやられる前に窒息する！」

「どんなことをしたら、あんな風になるんですか…」

次回、Ｓａｖｅ－５：ある意味最強の敵

正義と平和の名の下に、セイバーナイツ、参上！！

Ｓａｖｅ－５：ある意味最強の敵　（前編）

ぽかぽかと陽気が気持ち良い。
あの鰐の刺客が現れてから、二週間近く経つけど…今のところ、プラチナスに動きは無い。
まあ、動かないだけで、諦めた訳じゃないのだろうけれど。
思いながら、僕は花の手入れをする。そう言えば、あの子はどうなったんだろう。
蒼野氷女と名乗った、あの可愛い彼女。無事、自分の家に到着したのだろうか。花を探しているみたいだったけど、あれ以降顔を見ないし…
いやそもそも、店の場所を教えてなかったし、彼女だって偶々この町に来ただけかもしれなかったのに…そんなことで、よく僕は「花をリザーブしておく」なんて言ったなぁ。

「はぁぁぁぁ」

深い溜息を吐きながら、思い出すのは彼女が最後に見せた笑顔。

―また、お会いしましょうね―

…可愛かったなぁ、あの子……

「はふぅぅ」
「溜息の吐きすぎだ、この馬鹿」
「あ痛っ！」

僕の考えを中断させるかのように、槍が何処からか取り出したハリセンで僕の後ろ頭を思い切り叩く。

それを見て、店の奥にいたトゥランもくすくすと笑った。
「…何で槍はそんな風にバシバシ僕に突っ込むかなぁ…」
「お前の溜息が鬱陶しかっただけだ」

そう言いながら、更にすぱんっと乾いた音を響かせて僕の後頭部を一発叩く。
まあ…多分、槍なりに心配してくれた結果ってことなんだろうけど…これ以上馬鹿になったらどうしてくれる！？
折角覚えた花言葉とか、抜けてっちゃうじゃないか！

「お前の無いに等しい脳みそで考えた所で、この間の女がここに来る訳で無し。待つなら待つ、諦めるなら諦めるで、腹を決めろ、この馬鹿が」
「…散々な言い様だな、槍…」
「お前にはこれだけ言ってもまだ足らんだろうが。自覚しろ」

何をっ！？これ以上僕に何を自覚しろと！？
と、突っ込みたい気持ちをぐっと堪え、僕は恨めしげな視線を送るだけにとどめておく。
だって、これ以上反論したら、槍の更なるきつ～いお説教が待ってそうなんだもん。
実際昔、反論したら小一時間説教くらったし。

「はあ…」
「だから溜息を吐くなと言ってるんだ、鬱陶しい」

すぱぁんっと軽やかな音と共に、この日何度目かの槍の攻撃をくらいながら…やっぱり僕の頭の中には、彼女のことがちらついて離れなかった。

…蒼野さん…大丈夫かなぁ……

＊

そして、それは唐突にやってきた。
奥のパソコンから鳴り響く、緊急警報。プラチナスの連中のバリアが、解除された証だ。

「急いで下さい！相手も最近、本気のようですから！」
「ああ、分かってる！」

僕達は軽く頷くと、僕達はいつもの森の中へとバイクを駆った。
そして、森に到着した時。奇妙な違和感を覚え、僕は思わずその場に立ち止まった。
…なんだろう、いつもよりも煙っている様な…

「光？」
「あ、ゴメン。何か…妙な感じがして」
「……お前のそう言う勘は良く当たるからな。ここから変身して行くぞ」
「了解。ナイトチェンジ」

ブレスレットのスイッチを押し、収納されたナイトアーマーを纏って、僕達は森の中へと足を踏み込む。
やはり…視界が曇っているように思う。まるで霧の中にいるような…
そう思った瞬間。物陰から、ひょっこりと異形が顔を出した。
「き…きのこぉっ！？」

思わず素っ頓狂な声をあげてしまったが、確かに目の前の「異形」はキノコだ。人より一回りくらい大きい、赤い笠を持つきのこ。笠の真下くらいにおじさんのような顔がついており、柄からは細い手足が普通に生えている。

きのこ人間、と表現した方が良いかもしれない。

僕の声に気付いたのか、そのきのこ人間はちらりと僕の方を見ると、そのだるそうな顔を顰めて、一言。

「あぁ～…やる気出ないなぁ…」

待て。いや、やる気を出されても困るけど、ここまで堂々とやる気の無い刺客も初めてだよ？

「お前さん達、セイバーナイツだろ？名刺も何も無いけど、おじさんは公爵、ブリザラ閣下の配下で、フライアーガって言うの。よろしくねー」

いやいや、本当に何処までおっさんなんだ、このきのこ人間…もとい、フライアーガとか言う刺客は！

まあ、よろしくしちゃまずい訳だけど！

「貴様等のような侵略者と、よろしくやるつもりは無い！さっさと…消えろ！」

そう言うが早いか、槍はすらりと剣を抜き放ち、フライアーガを倒さんと袈裟懸にその剣を振り下ろす。だが、その剣はギリギリのところでかわされ、虚しく宙を切るばかり。

あいつ…やる気が無い割に、強い！

「元気だねー。若い証拠だ、良いね～おじさんもあと数年若ければ

…」
「悪いけど、今はそんな愚痴聞いてあげる暇、無いんだよ！」
やれやれと肩を落とすフライアーガに、今度は僕が縦一閃に斬りつける。だが、それも紙一重でかわされ、ひゅんと空気を切る音しかしなかった。
やっぱりあいつ…何気に強い。
「ああ、そう言えばおじさん、最優先の仕事は、お前さん達を倒すことだったっけ。いやー、年取ると忘れっぽくていけないねぇ」
「何を今更…っ！」
「そうだね、今更だね。だから…」
言葉を紡ぐと同時に、今までやる気の欠片も無かったフライアーガの顔が、真剣なものになる。
その瞬間、それまで感じられなかった強烈な殺気が、僕達に向かって叩きつけられた。
仮面越しにも分かる、強烈な殺気。今までこんな激しい殺気を持っていた敵、いなかったぞ！
思うと同時に、僕の眼前にフライアーガの顔があった。
「セイバーライトニング、まずは貴様が死ね」
「まず…」
まずい、と言うよりも先に、相手の拳が僕のみぞおちに入る。
「が…はっ！」
細い腕の何処に、こんな力があるんだろう。思わずその場に膝をつきそうになるのを堪え、僕は剣を杖代わりにして何とかその場に

踏みとどまる。
「何て…パワーだ…っ！」
「人を見かけで判断してはいかんよ、セイバーナイツ」
何とか絞り出した声に、余裕気に返しながら、今度は槍に向かって、僕の時同様その拳を叩き込む。
くそ…早い。それに、今までの奴と何かが違う…！
「だけど…負けてたまるか！」
「威勢だけは良いな」
「それだけが、僕の取り柄みたいなものだから…ね！」
何とか体勢を立て直し、僕と槍は相手に向かって再び切りかかる。
だが、案の定その攻撃も、軽やかにかわされてしまい、逆に僕達の背に一撃ずつ蹴りを入れられてしまった。
何なんだこいつ…見た目の馬鹿っぽさに反して、異常に強い…！
そう思った僕に気付いたのか、フライアーガはフンと軽く鼻で笑うと…
「仮にもおじさんは公爵閣下の配下。あのお方に仕えるなら、これくらいは出来ないといけないんだよ」
まるで子供に諭すように言うけれど…それが反ってムカつくって言うか…
ぐぐ、と立ち上がろうとした瞬間。フライアーガの顔が、哀れむような物に変わった。
「立ち上がろうとするその気概は誉めよう。だけれど…」

瞬間。
くらりと、眩暈がした。
な…何だ…？気持ちが悪くて…立てない？
「そろそろ、効いて来た様だね。」
そう言ったフライアーガの声が…やけに遠く聞こえた…

Ｓａｖｅ－５：ある意味最強の敵　（後編）

思考がぼんやりする。強烈な吐き気が僕を襲い、呼吸も出来ない。
何だ…これ…っ！？

「君達、森に入る時不自然に思わなかったかい？」

その場に蹲る僕達を、蔑むように見下ろしながら、フライアーガはその場に蹲る槍を、こちらに向かって蹴り飛ばす。
容赦ない蹴りに、槍は低く呻き、悔しげに相手の顔を見上げるが…多分、彼も僕と同じ状態なのだろう。ぜいぜいと肩で息をしながら、相手に向かって行く体力など無いように見えた。
一体…何をされたって言うんだ？

「君達がここに来る前にね、私の胞子を蒔いておいたんだ」
「胞…子、だと？」
「そう。君達は胞子の充満する森の中を動き回り、知らず知らずのうちに毒を吸い込んでいたのだよ。まさかこんなに上手く行くとは、おじさんも思わなかったけどね」

く…森に入る前に、やけに煙っていると思ったけれど…まさかきのこの胞子だったなんて…！

「ああ、簡単すぎると、本当にやる気出ないなぁ～。もういっそ、この猛毒胞子で死んでもらおうか」

ふう、と溜息混じりに言われた言葉で、ぼんやりしかかった意識が覚醒する。
まずい、逃げないと。何かすっごく嫌な予感がする！

槍も同じことを思ったのか、苦しそうにしながらも、割と俊敏な動きでその場から離れた。
その瞬間。今まで僕達のいた所に、ドス黒い色をした大量の胞子がばら撒かれる。いや、アレを胞子と呼んで良い物か。何しろ、一つ一つの大きさがソフトボールくらいあるのだ。
もはやそれは、胞子とは言わない気がする。

「冗談だろう？あんな巨大胞子、毒にやられる前に窒息する！」

こんな危機的状況でも、ツッコミを忘れない槍に感謝。
僕も同感。あんなの、吸い込めないし。仮に吸い込んだとしても、喉やら鼻やらに詰まって間違いなく窒息する方が早い。

「おやおや。危機回避能力は高いんだねぇ。おじさんちょっと感動」
「お前に感動されても…嬉しくないな」
「同感」

ぐぐ、と何とか自分の体を起こしながら、僕達は相手を真っ直ぐに見据え、再び剣を構える。
気持ち悪いとか、苦しいとか、そんなことを言ってる場合じゃない。
僕達が倒れたら、もっと沢山の人が、今の僕達と同じ思いをするに違いない。世界中の人が殺され、あいつらの望む通りになる。そんなの…許せる訳が無い！

「成程、気力で立ち上がるか」
「悪いね。こっちだって、世界を守るって言う大義名分があるんだ」
「貴様らのような侵略者に、負ける訳には行かないんでな！」

怒鳴って言葉を返すと、死に物狂いで剣を振るう。それは槍も同

じらしい。毒なんかにやられている場合じゃないと言う思いが、今まで以上に動きを良くしているように思えた。
…まあ、その分後の反動は結構キツイだろうけれど。実際、今でも吐き気はするし、フライアーガの顔が二重になって見える。息だって上手く吸えないし、そのせいか頭だって朦朧としている。
だけど、それでも…僕は、僕達は。
この世界を、守るんだ！
その思いと共に振るった剣は、相手の笠の部分をばっさりと切り落し、落とされた部分は僕の足元でざらりと音を立てて青い塵と化した。
胞子とは違う、今まで見てきた刺客と同じ…「亡骸」だ。
ぼんやりとだが、分かる。フライアーガの顔が、さっきまでのやる気の無い物から、生き生きと楽しそうな物に変わっているのが。
楽しんでる。僕達との、戦いを。

「楽しいねぇ。おじさんはこう言う奴と戦いたかったんだよ」
「俺達は…」
「全っ然楽しくないけどね！」

冗談じゃない。戦うことが、楽しいなんてあるはずが無い。きっと、僕達と侵略者達とは、永遠に分かり合えない。少なくとも、こんな刺客がいるのならば。
振るった剣が、再び相手を捕らえ、今度は深々とその体に傷を作る。
槍の攻撃も相まって、相手の体には、はっきりと「×」を描くような傷がついた。
間違いない。相手の動きが…鈍った！

「終わりにさせてもらうぞ、フライアーガっ！」

僕はそう怒鳴ると同時に、剣の柄に宝玉を嵌めこみ、必殺技の準備に入る。
瞬間。相手は悟ったらしい。
この戦いにおける、自らの敗北を。
彼は身動きが取れぬまま、どこか穏やかな表情で何事かを呟き…だけど、僕達の剣は彼の体を容赦なく切り裂いた。
「無様にも敗北を喫した事…誠に…申し、訳……」
最後まで言葉を紡ぐことは出来ず…彼は、その身を「青」の塵となって散らせた。
＊
「どんなことをしたら、あんな風になるんですか…」
ナイトアーマーの整備を開始するなり、トゥランにしては珍しい、顰め面でそう言いながら、彼はナイトアーマーについたきのこの胞子をバシバシと払いのける。
だけど…うう、やっぱり気持ち悪い…
「…きのこの形をした、刺客だったんだよ」
「きのこの……？」
何とか搾り出した声に、トゥランは更にその綺麗な顔を顰め…深刻そうな表情で俯いた。
そう言えば、彼もプラチナスと同じ世界から来たんだっけ…
「きのこが、どうかしたの？」
「…いえ。きのこが…と言う訳じゃ、無いんです」

悲しそうな表情で、きつくその拳を握り締めながら。トゥランは、僕の知らない誰かを思っているらしい。
そして、それは多分…彼にとって大事な人であると同時に…僕達の敵の一人なのだろうと、容易に想像できた。

「きっと…あの人は、決めてしまったんだ…」

小さく呟かれた「あの人」と言う単語から考えると、家族って訳じゃ無さそうだけど…それを聞き出す程、僕は野暮じゃないつもりだ。
…そりゃあ、気にならないって言ったら、嘘になるけど。
でも、きっとトゥランのことだ。きっと、いつか…必要な時だと判断したら、話してくれるに違いない。
そう信じて…僕はぐったりとその場に横たわった。
……うううぅ…気持ち悪い…

Ｓａｖｅ－５：ある意味最強の敵　（後編）（後書き）

次回、ＳＡＶＥＲ　ＫＮＩＧＨＴＳ　－ＳＩＤＥ　Ｋｎｉｇｈｔｓ－

「あ…うわあっ！」

「トゥラン！」

「貴様ら…よくも俺達の弟分を！」

次回、Ｓａｖｅ－６：牙剥く狼

正義と平和の名の下に、セイバーナイツ、参上！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7362i/

SAVER KNIGHTS　―SIDE Knights―

2010年10月8日22時05分発行